



社会科古代史教育と豪族の位置づけ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 芳信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004160

社会科古代史教育と豪族の位置づけ

遠 藤 芳 信

I 古代史教科書における物部氏の記述とイメージ

1972年の高松塚古墳壁画発見以降、多くの著名な古代遺跡等の発掘・発見がつづいている。特に、1985年7月以降から発掘調査がすすめられた（後に中断し、1988年再開）奈良県の藤ノ木古墳（斑鳩の地にあり、法隆寺から南西300mの地に位置し、6世紀後半と推定されている）における石棺には、国際的な超豪華な金銅製の馬具や冠等が副葬されており、被葬者は皇子級か一流豪族関係者であることを推測させるものであった。以上の特に1970年代以降の古代遺跡等の発掘・発見およびその研究調査は、古代史教育の先入観や「常識」の修正・変更を要求するものが数多くある。本稿が考察対象にする古代豪族のイメージも、その一つである。その中で、本稿は特に物部氏のイメージを明確にするものである。

まず、高等学校日本史教科書における物部氏の記述としては、たとえば、以下のようなものがある⁽¹⁾。

第一に、5世紀後半からの大和王権の政治組織（氏姓制度、伴造制）における豪族の分類記述である。

たとえば、

「豪族は血縁によって結びついた同族集団（^{うじ}氏）に組織され、^{うじひと}構成員氏人となり、その首長である^{うじのかみ}氏上にひきいられて大和王権に仕えた。このなかで、居住地を氏の名とした平群・巨勢・葛城・^{そが}蘇我氏などが有力であり、また特定職務をもつ^{ものべ}物部・^{なかとみ}中臣・^{いんべ}忌部・^{はじ}土師・^{おおとも}大伴氏などは、それぞれの職務を分担し世襲した。このような職務で仕える豪族の首長を^{とものみやっこ}伴造とよぶ。大和王権は氏の家柄や身分に応じて^{かばね}姓をあたえ、そのなかの中央の主要氏族には^{おみ}臣・^{むらじ}連の姓があたえられ、特に有力なものを^{おおみ}大臣・^{おおむらじ}大連と称した（氏姓制度）。」

という記述である。すなわち、物部氏は、職名を姓として、古来、大王家に直屬的に仕えてきた豪族として位置づけられている。物部氏の職務は軍事を管掌するものである。この軍事管掌氏族としての物部氏のイメージは、特に近代社会では、1882年軍人勅諭の冒頭文章（「我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率る中国のまつろはぬものともを討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しろしめし給ひし」云々）によって、一般国民の脳裏に刻印させられてきたものである。なお、多くの教科書では、大和周辺における豪族分布図として、岸俊男作成原図の「大和周辺の氏族分布」を資料として掲載している。そこでは、三輪山西麓の「大王家」をはさみ、物部氏（北方の石上神社周辺）と大伴氏（南西部周辺）の位置を示している。

第二は、6世紀前半の大和王権の対朝鮮政策との関係である。すなわち、

「5世紀末から6世紀にかけての朝鮮では、^{こうくり}高句麗・^{しらぎ}新羅・^{くだら}百済の争いがつづき、新羅が勢力を強めていった。百済と結んでいた大和王権は、^{から}加羅（任那）の防衛を理由に軍隊を派遣したが、

527年、北九州で筑紫国造磐井つくしのくにみやつこいわいによって阻止された。また6世紀前半、朝鮮政策に失敗した大連おおむらじの伴金村おおもものかなむらは、物部氏ものべによって失脚させられた。」

と記述されている。

すなわち、対朝鮮政策との関係で、大連の伴金村がもう一人の大連物部尾輿おのおみによって失脚させられた後、物部氏が大臣の蘇我氏と並んで、大和王権を支える重要豪族に成長するのである。なお、注記として、同上三省堂では、「筑紫国造磐井は、近江毛野ひきいる新羅への派遣軍の行く手をはばんだが、翌年、物部麁鹿火によって破られた。」と記述されているが、これによって、上述の物部氏の軍事管掌と戦闘力の強さが理解される。

第三は、仏教崇拜問題や王位継承問題をめぐる蘇我氏と物部氏との対立関係の中で、物部氏本宗が滅亡し、蘇我氏が全盛時代を迎えるという記述である。

「朝廷のなかで、主要氏族の一つである蘇我氏が、大王(天皇)家と婚姻関係を結び、みやけ屯倉の経営や渡来氏族の東漢氏の協力によって、しだいに政治を主導するようになった。そして大臣蘇我稲目が、やまとのあや仏教の崇拜問題で物部氏と対立すると、つぎの蘇我馬子は、王位の継承をめぐって大連の物部守屋もりやを攻めほろぼし、朝廷での地位を確立した。その後、馬子はみずから擁立した崇峻天皇を暗殺して政治を独占した。」

この場合、特に「仏教崇拜問題」をめぐる蘇我氏と物部氏の対立関係が記述されているが、それは、流布されているように、『日本書紀』欽明13年(552年)における百済の聖明王献上の仏像等をめぐっての仏教の受容・礼拝論争をとりあげたものである⁽²⁾。すなわち、欽明天皇が仏像礼拝の可否を群臣に問うたところ、蘇我稲目は、西蕃諸国はすべて礼拝しているので、日本のみが礼拝しないわけにはいかないと述べて賛成したのに対して、物部尾輿は、蕃神(異国の神・仏)を礼拝するならば、国つ神の怒りを招くと答えて反対したという伝承である。さらに、その後の疫病流行時に、尾輿の子の物部守屋は、疫病流行の原因を蘇我氏が信仰する蕃神のせいだとして、仏像を難波の堀江に投げ捨て、寺を焼いたとされている。

以上のような蘇我氏と物部氏の対立・抗争の伝承によって、歴史的に、蘇我氏は親仏派・開明派・国際派としての豪族イメージがつくられ、物部氏は仏教排撃派・保守派・国粹主義者としての豪族イメージがつくられてきた⁽³⁾。すなわち、物部氏は軍事氏族とともに排仏派としてのイメージが強く描かれるに至っている。以上の仏教受容・崇拜問題をめぐる蘇我氏と物部氏の対立・抗争は、中学校歴史的分野教科書では、史実としての記述(本文記述)と、伝承的なものとしての記述(注記)に区分される⁽⁴⁾。

すなわち、前者としては、清水書院(護雅夫他著『日本の歴史と世界』1986年文部省検定済、1987年発行)や大阪書籍(時野谷勝他著『中学社会〈歴史的分野〉』1986年文部省検定済、1990年発行)の本文記述があり、「6世紀末には、朝鮮から伝えられた仏教をうけ入れようとする蘇我氏と、それに反対する物部氏が対立し、蘇我氏が物部氏をほろぼして力をのばしました。」と記述されている(大阪書籍)。後者としては、学校図書(土田直鎮他著『中学校社会 歴史的分野』1986年文部省検定済、1990年発行)や帝国書院(佐々木銀弥他著『社会科中学新歴史 最新版』1989年文部省検定済、1992年発行)があり、「物部氏は、百済が朝廷に仏像を送ってきたとき、仏教をうけ入れることに反対して、蘇我氏と争い、ほろびたことつたえられている。」(学校図書)と記述されている。これによって、「史実」「伝承」のいずれにおいても、蘇我氏と物部氏との対立・抗争の最重要争点⁽⁵⁾が、仏教の受容・崇拜をめぐるイデオロギイ的内容の相異が強調されることになる。さらに、帝国書院は、本文の「聖徳太子と仏教」というカコミ文章の中で、「仏教の信仰をめぐって物部氏と争った蘇我氏は、飛鳥寺を建てるなど、早くから仏教を信仰していました。(中略——遠藤)聖徳太子も、仏教を守るために、

蘇我氏の軍に加わって物部氏と戦ったり、四天王寺（大阪府）や法隆寺などを建てて、仏教を深く信仰しました。」と記述しているが、これでは、物部氏は宗教戦争によって滅亡したような認識が形成されるのではなかろうか。また蘇我氏の軍に加わった聖徳太子をこのように位置づけるならば、後述するように、法隆寺近傍の藤ノ木古墳の被葬者（物部氏関係者の推定が有力）を確定しにくくなっていく。

いずれにせよ、物部氏を軍事氏族と仏教排撃派として強く印象づけることは適切ではないと考える。本稿では、古代における軍事の意味（祭祀、呪術との関係）と、仏教受容・崇拝をめぐる蘇我氏と物部氏との間の対立・抗争の伝承をまず検討する。

II 仏教受容・崇拝をめぐる蘇我氏と物部氏との対立・抗争の虚構性

『日本書紀』欽明13年の仏教初伝および仏教受容・崇拝をめぐる蘇我氏と物部氏との対立・抗争に関しては、戦前から多くの史学者によって否定されてきた。

たとえば、津田左右吉は⁽⁵⁾、第一に、仏教に最も早く接したのは他の中国の文物と同様に朝廷およびその周囲の貴族社会であり、その信仰の具体的表示は造像建寺などにあったが、当時の技術の点からは容易にできがたいものであったと指摘した。したがって、仏教の初伝からそうした造像建寺などは、かなりの年月を経過し、推古朝頃が以上の意味における仏教信仰の形がととのえられるようになった時代であるとした。その際、仏像作成・寺院建立の時に、その寺院や仏教信仰の由来を説くことが必要であるが、もはや仏教の初伝事情は忘れられていたので、百濟聖明王の仏像献上伝説存在を幸いとして、それを仏教初伝としたのではないかと指摘した。

第二に、蘇我氏と物部氏との間の仏教崇拝をめぐる対立・抗争に関しては、仏教教義や儀礼等も理解されず、崇拝対象としての仏像がもたらされた時代に（かつ、百濟や中国の文物すべてが尊尚・学習・愛用されていた時代に、さらに、物動や木石等の崇拝などが一般に行われていた時代に）仏教が民族的信仰に矛盾するものとして感じられたり、仏教に対して当初から強い反抗の情が生じたということは問題であると指摘した。すなわち、初めて仏像が献上された時に、意見が可否の二つに分かれたというようなことは疑いがあるとした。さらに、物部氏の同じような仏像投棄の記事（欽明13年と同じ理由と方法にもとづく）が敏達14年（585年）に見えるように、2回反復されていることも史実としては奇怪であるとした。そして、蘇我氏と物部氏の対立・抗争は他の事情から起因していることに注目すべきであり、蘇我氏が仏教を信仰し寺院建立・僧尼保護をしていることによって、後来、蘇我氏を徳とする仏家が、蘇我氏に他の事情で対立する物部氏を仏敵とし、両氏の争いに宗教的意義を付与して世に伝えたという事情があるのではないかと指摘した。

蘇我氏と物部氏の仏教受容・崇拝をめぐる対立・抗争を史実でない説話とする以上の津田左右吉に対して、田村円澄は次のように津田説を批判する⁽⁶⁾。

第一に、百濟から献上された仏像・経典などが容易に宮廷に迎えられず、天皇家の仏教受容をめぐって欽明朝から舒明朝に至る一世紀間に葛藤があったとみるべきであり、そうした期間における仏は日本の神と同質のものとは考えられておらず、したがって、宮廷内では仏教疎外派と仏教受容派とが鋭く対立したとみるべきであるとした。第二に、古代の天皇は宗教的祭祀者としての任務を拒むことができず、欽明は他国神を宮廷に迎えることによって生ずる既存の神の秩序の動揺を危惧し、さらに、三輪山や石上神宮の神威も仏教の宮廷流入を拒むのに有力な役割を果たしたことが考えられ、深刻な思想的対抗があったとみるべきであるとした。第三に、蘇我氏と物部氏との対立・抗

争による物部氏本宗の滅亡後、蘇我氏を徳とする仏家が、なお物部氏を仏敵とする必要性がどれだけあったらうかと疑問視し、さらに、蘇我氏滅亡後、仏家が蘇我氏の外護者としての役割をそれほど高く評価しなければならない必要性はなかったのではないかと指摘した。また、仏像の投棄が二度も反復されたという記述は、庚寅年に1回行われた「破仏」にもとづくものであり、仏像が難波の堀江になげすられたのは古神道の祓えの慣行によるものであると指摘した。

田村は、さらに近年では、仏教受容をめぐる蘇我氏と物部氏の対立・抗争の意味については、蘇我氏は天皇家から相対的に独立している臣姓豪族なので、仏教受容という独自の判断を下せるが、物部氏は天皇家への隷属性の強い連姓豪族なので、仏教受容に必ずしも賛成ではない天皇家に「右へならえ」をせざるをえなかった、と指摘した⁽⁷⁾。

筆者は、以上の津田説と田村反論に対しては、津田説が正しいと考えている。

田村反論によれば、欽明朝から舒明朝にかけての一世紀間に、宮廷内で仏教受容をめぐる思想的対抗がつついたとするが（すなわち、仏教とは何か、その教義内容の核心等が議論されたとみるべきだろう）、いずれにせよ、仏像を始めて見た物部氏が（仏教に対するその後の一世紀間の議論・論争を経たならば妥当であるが）、当初から即座に仏像礼拝に反対できるわけではないと考えるべきだろう。津田説はまさにこの点を指摘しているわけである。また、「破仏」という行為・慣行も、仏教・仏像に関する認識・研究が深められたことにもとづくものであり、物部氏が仏教・仏像に当初から反対するならば、排撃対象の仏教・仏像をそもそも深く認識し研究するわけではないと考えるべきだろう。

田村反論は、仏教受容をめぐる蘇我氏と物部氏の対立・抗争の論拠を臣姓氏族と連姓氏族の差異に求めようとしている。しかし、当時の天皇家・皇族が一枚岩にまとまっていたわけではないので、天皇家の見解が一つに統一されていたという前提のもとに物部氏の判断をそれに近づけることはできないだろう。また、臣姓氏族と連姓氏族の差異という点から、『日本書紀』における物部氏の仏教排撃の相当なヒステリック的行動の表現はとらえられないだろう。さらに、物部氏の大連としての天皇家への隷属の強さの度合いは、大伴氏などよりさらに弱い伝承をもっている（大伴氏は「天孫降臨」や「神武東征」においても最初から天皇家に絶対随従している）、大連としての天皇家への「右へならえ」は考えられないだろう。

『日本書紀』の編纂事情からみた場合、原田敏明が「もし『日本書紀』のように、強い対外的意識がなかったとするならば、公伝の仏法についても強い排他的記事とはならなかったであろう」と指摘しているように⁽⁸⁾、物部氏における仏像排斥説話は、『日本書紀』編纂者の強い対外的意識を基礎にして潤色されたとみるべきだろう。なお、佐伯有清は、素弁蓮花文の飛鳥時代初期の高句麗様式の鏡瓦が出土した渋川廃寺は物部氏と関係があつて、仏教伝来時の物部氏は蘇我氏らと同様に仏教を受け入れていたという安井良三の推定を紹介しているが⁽⁹⁾、物部氏が仏教とは無縁であったという前提は立てるべきではないだろう。

III 記紀神話と物部氏伝承

一 神武東征神話と物部氏の祖先伝承

物部氏の成立は、「部」の成立を前提としているので（5世紀前半）；比較的新しい氏族とされている。しかし、それは、職掌の名称の新しさ（呼称・命名）を意味するものであって、そのように呼称・命名される以前の豪族集団の新しさ・古さを意味するものではない。

ところで、物部を「もののふの部」と解し、物部氏を軍事を職掌として仕える人々とするのが、本居宣長などの古典的な説である。次に、物部の「物」とは、①物具や武器を指すという津田左右吉らの近代の説や、②精霊・鬼神を指すという折口信夫らの説もある。

以上の物部の意味をもってきた物部氏は、古代豪族の中で、大和王権の祖先と戦った伝承を残してきた。しかも、物部氏の祖先神とされる邇芸速日命（『日本書紀』では饒速日命）は、天照大神の孫の邇邇芸命の「降臨」に匹敵するような「降臨」神話をもっている。ニギハヤヒノミコトは、登美能那賀須泥毘古（あるいは登美毘古と記される、『日本書紀』では長髓彦）の妹の登美夜毘売をめとり、宇麻志麻遲命を生み、その宇麻志麻遲命が物部連の祖とされている。ニギハヤヒノミコトは、神武東征よりも以前に大和に先住した。そして、『日本書紀』によれば、義兄のナガスクネヒコは神倭伊波礼毘古命（神武天皇）の大和征討に対して、激しく迎撃・応戦するが、ニギハヤヒノミコトはナガスクネヒコを殺し、「天津瑞」という神宝を献上して、神武天皇に帰順したという神話概略である。

なお、『古事記』には、大和征討の最終段階におけるナガスクネヒコの登場は記述されていない。また武力的衝突も記述されていない。この点に関して、鳥越憲三郎は、『古事記』が大和平定の最終段階で物部氏の降服を述べつつもナガスクネヒコに言及しなかったのは、当該部分の欠損ではなく、後代における天皇家と物部氏の婚姻による政治的提携を反映したものと指摘している⁽¹⁰⁾。すなわち、第8代孝元天皇は、第7代孝霊天皇が都葛城の地から大和平野中央部に進出させたにもかかわらず、再び畷傍山に近い軽の地にもどした。これは政治的後退でなく、大和北部と河内国を占めていた物部氏から后と姫を迎えているので、勢力強大な物部氏との武力的対決を企図したかもしれないし、あるいは物部氏を征し、政略的結婚として后と妃とを物部氏から迎えたとも考えられるとした。第9代の開化天皇も先王の妃である物部氏出身の女を后として迎えているし、都を物部氏の本拠地に近い大和平野北部の春日の地に移しているのも、このような婚姻関係にもとづく物部氏に対する政治的制圧事情が神武東征神話に仮託されているのではないかと指摘した。いずれにせよ、記紀神話における物部氏の祖先伝承によれば、物部氏の祖先は大和北西部に強大な勢力をもっていたことがわかる。

二 石上神宮の管理をめぐる物部氏伝承

石上神宮は現在の天理市布留町にある。祭神は、布留御魂剣（フルノミタマノツルギ。フツノミフマとも称せられている）という名称の霊剣と伝えられている。

石上神宮は古代の大和王権の巨大な武器庫であった。石上神宮に収納されている武器の数量の莫大さは、9世紀初頭の桓武天皇時代の運搬に要したとされている人夫の人員（のべ15万7千余人を用いたとされている）によって推測される。ただし、この武器は実際の戦闘用の武器のみでなく、後述の「神宝」としての祭祀用刀剣（神剣）も含まれていた。この祭祀用の刀剣等の中で、大和王権に服属した地方豪族所有の神宝は、天武天皇3年の時代にそれぞれの旧所有者に返還されたとされている。その後、平安時代には、石上神宮から石上布都御魂神社に名称され、後述の物部首の子孫の布留朝臣の氏神になっていく。

石上神宮の祭祀の起源については、『日本書紀』の第11代天皇垂仁39年にみえる。すなわち、イオニシキノミコトは茅淳という現在の大阪府和泉で川上部（別名、裸伴）と称される剣1千口をつくり、石上神宮に納め、後に同神宮の神宝を管理したとされている。しかし、この本文記事の次に、別伝異説としての「一書」がある。そこでは、イニシキノミコトは茅淳の菟砥川上に居て、河上という名の鍛冶師に大刀1千口をつくらせ、忍坂邑に保管した。その後、大刀を石上神宮に移動させたが、

その時、神が春日臣の一族の市川という人に治めさせよと述べたので、イニシキノミコトは市川に治めさせたとされている。そして、この市川が今日の物部首の祖始とされている。この物部首は、物部連とは系統が全然異なるものである。物部首は、津田左右吉によれば、「新撰姓氏録（816年成立～遠藤）大和国皇別の部に布留宿禰とあるもので、石上の地に土着していた豪族と見なければならぬ。」と指摘されている。そして、物部首は石上神宮との関係も古くからあり、同「一書」は物部首の家の家伝から出たものではないかと述べている⁽¹¹⁾。

物部連が石上神宮にかかわって登場するのは、その後、数十年を経てからである。すなわち、垂仁天皇 87 年に、イニシキノミコトは、老化のため神宝を管理できなくなったので、妹のオオナカツヒメに管理を依頼した。しかし、オオナカツヒメは「天神庫」（神宝の保管庫）は高く登れないので辞退すると述べた。これに対して、イニシキノミコトは、ハシゴを造ってやるので登るのに困ることはないと述べた。しかし、オオナカツヒメは物部十千根大連に治めさせ、これによって物部氏は今日に至るまで石上神宮の神宝を治めることになったことの縁であるという伝承である。モノノベノトオチネは物部連の遠祖とされ、同じ垂仁天皇 25 年では、神祇祭祀奨励の詔をうけたとされている。また、同 26 年には勅命によって、出雲国の神宝を検校し、同神宝を管理したとされている。

そうだとすると、石上神宮の祭祀管理伝承をめぐる物部連と物部首との関係はどのようになるだろうか。この点に関しては津田左右吉が次のように述べている⁽¹²⁾。すなわち、石上神宮の神宝が武器になり、その神が武神にさせられていたために、武臣としての勢力をもっていた物部連が自家の管理下においたことである。この物部連の管理に対しては、双方の争いもあったが、物部首側が物部連の家に服従し、その部下になることによって結着したと推測している。それは、通常の慣例では石上の地の土着豪族はその地名を氏の名にしているにもかかわらず、首の家が氏の名を物部としていることから証明できるとした。すなわち、物部は朝廷の部の名であるから、地方的豪族が初めからその名を自己の名とすることはありえないからであるとした。かくして、物部連は石上神宮とその神宝の管理権を掌握したが、首の家では古くからの家の地位を忘れず、そのために上記のような二つの物語がつけられたのであると述べている。津田の指摘は、伴造の勢力変遷にあたって、特に勢力のある家が旧家を圧倒して併呑した事例として石上神宮の管理に関する由来を述べたものであるが、首貢できるものである。

なお、この場合、泉谷康夫が、二つの物語に共通するものとして、石上神宮における神宝の管理がイニシキノミコトという皇親の手から離れ、物部という伴造に移ったということ——すなわち、石上神宮の祭神が天皇家の祖先神としての性格を失ったこと——の意味こそが重要であると指摘していることも、十分に注目してよい⁽¹³⁾。

三 物部氏による石上神宮の管理の性格

それでは、物部氏による石上神宮の管理の目的・役割はいかなるものだろうか。

第一に、岡田精司は、物部氏による石上神宮の管理の役割は、伊勢神宮（天皇家の祖先神をまつる）において、荒木田・度会の両氏族が職務的に祭祀を司ることに似ていると指摘している⁽¹⁴⁾。すなわち、物部氏の祖先は記紀神話にみられるようにニギハヤヒノミコトという伝承があるので、石上神宮の祭神（フツノミタマ）を氏神として祭る必然性はなく、物部氏と石上神宮との関係は氏子と氏神との関係ではなく、大和王権における職掌の分担として奉仕していたと指摘した。岡田精司の指摘によれば、物部氏の石上神宮とのかかわりは、職務上ではあるが、石上神宮の軍事・武器の管理とともに、祭祀の奉仕・執行をめぐる管理もふくまれていることになる。

ここで、物部氏系の祭祀・呪法の特徴はいかなるものだろうか。物部氏系の祭祀・呪法の特徴は、

鎮魂呪法にあるとされている。上田正昭によれば、「鎮魂」の古訓には、(1)オホムタマフリ・ミタマフリと、(2)オホムタマシヅメ・ミタマシヅメの二通りがあり、一般的に「鎮魂」とはタマシヅメの義に解釈されているが、物部氏系の鎮魂は(1)のタマフリの流れを中心としたものであると述べている。ミタマフリの鎮魂とは内部生命力を振起することであり、ミタマシヅメの鎮魂とは離遊するたましいを鎮めることであると概略的に把握してよい。上田は、物部氏の鎮魂呪法としてのミタマフリは、物部氏系人物によって編纂されたと想定されている『先代旧事本紀』(10世紀初頭成立推定)における瑞宝十種(物部氏の祖のニギハヤヒノミコトが、天降りに際して、天神御祖から授けられたとされる10種類の呪宝)をめぐる呪法として伝承されているものであると指摘している。すなわち、「ひとふたみよいつむななやごこのたり一三五四六七八九十」と謂ひて、あまつかみ布瑠部由良由良止布瑠部」と唱えごとをして、上記の十種類の呪宝を打振ると、死人も蘇生するという口授があったという伝承である。そして、上田は、タマフリとしての鎮魂の秘儀と呪法を長く持ちつづけたのは石上神宮であり、そこには物部氏系の鎮魂が不可分の関係があると指摘した⁽¹⁵⁾。

他方、土橋寛は石上神宮の『延喜式』神名帳における神社名として、(1)石上坐布留御魂神社(享保8年版本)と、(2)石上坐布都御魂神社(九条家本その他)の差異に注目し、(1)は祭神がタマフリの呪宝であったことにもとづく神名で、(2)は祭神をツツノミタマの宝剣だとすることにもとづく神名であるとした⁽¹⁶⁾。そして、石上神宮は古くは鎮魂の呪宝フルノミタマ(その中には剣も含まれている)を祭っていたが、その後にはツツノミタマの霊剣を祭るようになったと指摘した。この場合、ツツノミタマの「ツツ」とは物を断ち斬る形状を意味すると述べている。そして、石上神宮の祭神の名がフルノミタマとツツノミタマの二様に伝えられていることの歴史的意味として、フルノミタマもツツノミタマも共に物部氏が石上神宮に祭っていた霊剣の名で、「フル」と「ツツ」の違いは、タマフリの呪物としての機能と、武器としての機能の違いにすぎないと指摘した。

以上の、岡田精司、上田正昭、土橋寛の指摘は、物部氏が石上神宮の祭祀の管理者にあったという点で共通するものである。

第二に、大和岩雄は、石上の地における神祀りの氏族は和珥氏であり、物部氏は石上にあった神宝の庫(武器庫)の管理を主としており、兵器の管理者であり、兵器の祭祀者ではなかったと指摘している⁽¹⁷⁾。すなわち、物部連は「神班物者・祭神之物」(『日本書紀』崇神天皇7年)を作る氏族であって、「八十万の群神」を祭る氏族ではなかったと述べている。そして、石上神宮における物部氏の役割としては、①神宝としての武器庫の警護と管理、②各地の服属者の武器を収納する役割、③神宝としての武器を作らせる役目があったと強調した。大和の指摘は物部氏による石上神宮の祭祀の奉仕・執行を否定するものである。大和の指摘が拡張されると、物部氏による祭祀・呪術全般へのかかわりが極めて狭く把握されることになる。なお、横田健一は、物部氏の伴造変遷にかかわって、物部氏は元来、皇室に隷属して、神祭所用品を造り、さらに武器を造る工人の伴造であったと指摘した。そして、さらに進んで、武器をもって宮門の警護や警察官刑事、典獄の用務につき、さらに軍隊の司令官の地位に至り、政権の座につき、大連と称するまでになったと指摘している⁽¹⁸⁾。横田健一の指摘は、物部氏がモノ(祭祀用品と武器)の製造と管理を職掌としたとするものであって、大和の指摘に近い。

以上のように、物部氏が石上神宮の祭祀の奉仕・執行の管理にはたした役割に関しては賛否両説があるが、筆者は後者の大和岩雄の指摘に近い。しかし、石上神宮の祭祀には直接的に関連せずとも、物部氏における祭祀・呪術をめぐる、特に戦争・戦闘・武器をめぐる祭祀・呪術に関してはさらに深められるべきであると考える。

すでに、多くの古代史学者や民俗学者・神話学者等によって指摘されているように、古代社会に

おける戦争・戦闘は、人間と人間との物理的な戦争・戦闘だけでなく、その部族の神と神との戦いでもあった。したがって、遠征には部族の祭神の分霊を持っていき、その呪術の力を借りることになる。そして、部族の降服はその部族の神の降服を意味することになり、その部族が所有する祭神や神宝を献納させることになる⁽¹⁹⁾。その結果、天皇は全国の部族の神宝を一カ所に集め、フツノミタマ（前出）の威霊のもとに抑えて収納することによって、日本中の国魂を押えることになる（すなわち、武力的政策と呪術的行為の結合）⁽²⁰⁾。同様に、土橋寛は、諸国の首長が保持している呪宝はその国の国魂としての意味をもち、それらの呪宝を石上神宮に収納することは呪術的な中央集権の方法であったと指摘している⁽²¹⁾。

以上のように、古代社会における戦争・戦闘・武器と祭祀・呪術との関係をみると、軍事氏族としての物部氏が宗教的行為に無関係であることはない。さらに、黛弘道は、律令制下における物部氏の任務に関して、軍事氏族としての物部氏が派生的に司法・警察的な仕事をやっていることの意味は、「古代の裁判は神意による判断を基準にして、人間の能力では判断できないことは神様の判断に任せ」られていることであって、物部氏は祭祀的性格が濃厚の故に裁判の結果としての判決や処刑にかかわる機会が多かったと指摘していることも重要だろう⁽²²⁾。すなわち、物部氏の位置づけに関しては、古代社会における祭祀・呪術・宗教に関する全体的研究がさらに深められことが期待されている。

IV 藤の木古墳の被葬者と物部氏関係者

藤ノ木古墳出土の副葬品については、すでに高校日本史教科書でも紹介されている⁽²³⁾。また、本稿冒頭で述べたように、今日の古代史ブームの中で、藤ノ木古墳の被葬者がさまざまに推定されている。これらの推定の中で、被葬者の有力な仮説としては、作家黒岩重吾による物部氏関係者の指摘がある。同時に、仮に被葬者が物部氏関係者となった場合、上述のように、古代史教育における豪族——物部氏——のイメージを大きく変更しなげなければならない。また、逆に、今日までの古代史教育における豪族のイメージを変更しなければ、藤ノ木古墳の被葬者等の実像適切に迫ることはできないだろう。

1985年の藤ノ木古墳の石棺の発見後、その翌年の『週刊朝日』1月19日号に、森浩一と黒岩重吾の対談が掲載されている。同対談の中で、黒岩は石棺被葬者の第一候補者として物部尾輿をあげていた。物部氏を被葬者とする指摘は黒岩が最初であるが、被葬者が物部尾輿本人か否かはともかくとして、物部氏を第一候補者としたことは卓見であり⁽²⁴⁾、考古学・歴史学界に大きな影響を与えている⁽²⁵⁾。同対談の中で、森浩一と黒岩は、藤ノ木古墳の地理的位置——すなわち、奈良県の大小の河川は奈良盆地から河内に抜けるときに大和川に合流して1本になるが、斑鳩は川が集まる要の位置にあり、交通の要衝であり、河川交易、物資の集散のセンターであったこと、要するに瀬戸内海海上ルートともつながる河内と大和との連結点であったこと——に注目している。この地理上の位置は、同地域を押えていた豪族の経済的実力蓄積の基盤形成になったことはいうまでもない。そして、そのことは、藤ノ木古墳の被葬者が、同地域を支配していた豪族と密接な関係をもっていたことを当然意味するものである⁽²⁶⁾。

本稿では主として、以上の大和川流域の支配豪族としての物部氏の位置を中心に考察するが、黒岩は大和岩雄との対談を経て⁽²⁷⁾、自説を次のようにまとめている。すなわち、物部氏の本拠地は、大和川水系の平野川と長瀬川が河内湖に注ぐ根っ子に相当する渋川にあり、河内側の大和川水路を

支配していた。そうした物部氏が大和側の和川水路を押え、その交通権を掌握したのは当然であり、同水路の要衝点としての斑鳩地域も押えていたと指摘した。この点に関しては、黒岩はさらに物部氏伝承を含めて次のように理由づけている。

すなわち、物部氏は、一般的には石上神宮と武器庫を管理し、全国の領土と部民をも持つ軍事氏族と理解されているが、祖先伝承を考えると海人的な性格も強いとした。『先代旧事本紀』には、物部氏の祖ニギハヤヒノミコトは天磐船に乗って河内国の河上の喙^{いかるがのみね}峯に降りるが、船長は跡部首の祖であり、梶取は阿刀造の祖であると記述されているとした。この「跡」は「阿刀」であり、「安堵」と書かれることもあり、斑鳩近傍には安堵があり、大和川上流の田原本町付近にも阿刀があり、物部氏との結びつきが強いとした。すなわち、物部氏は奈良県の大和川の重要地域も押えていたことが推察され、物部氏伝承における天磐船はたんに空を飛ぶ船ではなく、海人族としての水運業の性格を物語っていると指摘した⁽²⁸⁾。さらに、海人族ならば、海外との交易も活発に行い、海外にも進出し、大陸文化の摂取にも意欲的であることはいままでもない⁽²⁹⁾と強調した。

以上の黒岩重吾の指摘は、物部氏の豪族イメージを、軍事氏族・祭祀氏族として描き出すだけでなく、水運業という物資流通機構の側面から把握するもので非常に注目されるものである。すなわち、水運業・物資流通という経済的方面から豪族の成長を把握するもので、物部氏は特に西日本を中心に物資流通の多くのネットワークを形成していたものと考えられる。それが物部氏の成長の経済的背景になったのであり、この経済的実力をぬきにしては、たんに軍事面・祭祀面だけでは、蘇我氏（大和王権の大蔵・財政面担当により、経済的実力を蓄積）と対抗できなかったものと考えられるのである。そうだとすると、藤ノ木古墳の被葬者は、同古墳の斑鳩地域の経済性を利用してたと推定される豪族であり、黒岩重吾が最初から指摘していた物部氏関係者であることは最有力の仮説になるだろう。

(注)

- (1) 青木美智雄他『詳解 日本史』1989年文部省検定済、1991年再版、三省堂。
- (2) 仏教伝来については、他に、『上宮寺聖徳法王帝説』『元興寺縁起』が538年を記述している。
- (3) 高等学校日本史教科書では、仏教受容をめぐる蘇我氏と物部氏との対立・抗争を、①伝承的なものとして記述しているもの（尾藤正英他『改訂 日本史』1982年文部省検定済、1992年発行、東京書籍。稲垣泰彦他『日本史』四訂版、1992年文部省検定済、三省堂。いずれも注記）、②史実的なものとして記述しているもの（江坂輝弥他『高等学校新日本史』最新版、1991年度用、自由書房。永原慶二他『高等学校 日本史』改訂版、1982年文部省検定済、1984年発行、学校図書。いずれも本文）、③まったく記述しないもの（家永三郎『新日本史』四訂版、1981年文部省検定済、1990年改訂発行、三省堂。宮原武夫他『高校日本史』三訂版、1983年文部省検定済、1989年発行、実教出版）、等がある。
- (4) 仏教受容をめぐる蘇我氏と物部氏との対立抗争に関して、まったく記述しない中学校教科書もある。たとえば、児玉幸多他『中学社会 歴史的分野』1986年文部省検定済、1990年発行、日本書籍。青木和夫他『中学生の社会科学 日本の歩みと世界』1986年文部省検定済、1990年発行、中教出版、などである。
- (5) 『津田左右吉全集』第2巻、86～98ページ、1963年、岩波書店、旧版は『日本上代史研究』1930年。
- (6) 田村円澄『飛鳥仏教史研究』148～154ページ、1969年、塙書房。
- (7) 田村円澄『古代朝鮮と日本仏教』61ページ、1985年、講談社学術文庫。
- (8) 原田敏明「古代宗教論」岩波講座日本歴史2（古代2）、304ページ、1962年。
- (9) 佐伯有清「貴族文化の発達」岩波講座日本歴史2（古代2）、190ページ、1975年。
- (10) 鳥越憲三郎『神々と天皇の間』56～58、268～270ページ、1987年、朝日文庫。
- (11) 『津田左右吉全集』第3巻、139ページ、1963年、岩波書店、旧版は『日本上代史研究』1930年。ただし、上田正

- 昭は物部首と物部連は別の氏族でなく、物部首は天武12年(683年)に新姓連を与えられ物部連になったと指摘している(上田正昭『古代伝承史の研究』34~36ページ, 1991年, 塙書房)。
- (12) 同上『津田左右吉全集』第3巻, 139ページ。
 - (13) 泉谷康夫「物部氏と宗教」横田健一先生古稀記念会編『日本書紀研究』第16冊, 23~24ページ, 1987年, 塙書房。
 - (14) 岡田精司『神社の古代史』121~122ページ, 1985年, 大阪書籍。なお, 石上神宮を物部氏の氏神とする説としては, 直木孝次郎「物部連に関する二, 三の考察」三品彰英編『日本書紀研究』第2冊, 180ページ, 1966年, 塙書房。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第1巻における「いそのかみじんぐう」(大場磐雄執筆) 600ページ, 1979年, 吉川弘文館。加藤謙吉『蘇我氏と大和政権』215ページ, 1983年, 吉川弘文館, 等がある。
 - (15) 上田正昭『古代伝承史の研究』34, 546ページ。
 - (16) 土橋寛『日本語に探る古代信仰』12~13, 107ページ, 1990年, 中公新書。なお, 土橋はタマフりはタマシツメよりも古いと把握しているが, これに関しては飯田勇「<鎮魂>・<天皇霊>を考える」『思想』第820号(1992年10月, 岩波書店)は異論を提出している。
 - (17) 大和岩雄『神社と古代王権祭祀』307~309ページ, 1989年, 白水社。
 - (18) 横田健一「物部氏祖先伝承の一考察」横田健一編『日本書紀研究』第8冊, 443ページ, 1975年, 塙書房。
 - (19) 前掲書, 鳥越憲三郎『神々と天皇の間』268ページ。
 - (20) 前掲書, 岡田精司『神社の古代史』124~127ページ, 大林太良「争いと戦い」網野善彦編『日本民族文化大系3 稲と鉄』364~367ページ, 1983年, 小学館, 等参照。
 - (21) 前掲書, 土橋寛『日本語に探る古代信仰』106ページ。
 - (22) 黛弘道「大伴氏と物部氏」門脇禎二他エコール・ド・ロイヤル古代日本を考える⑨『古代日本の豪族』33ページ, 1987年, 学生社。
 - (23) 井上光貞他『新詳説 日本史』改訂版, 口絵カラー写真「藤ノ木古墳出土の金銅製透彫鞍金具」, 1992年用, 山川出版社。
 - (24) 黒岩重吾『古代史の謎を探る』44ページ, 所収, 1986年, 大和書房。
 - (25) 門脇禎二「藤ノ木古墳と古代史学」日本史研究会編『日本史研究』第337号, 1990年9月, 等参照。
 - (26) なお, 大和川と物部氏との関係については, すでに亀井輝一郎が古代の重要な河川交通路としての意義を考察していた。亀井は, その中で特に物部氏伝承にも登場する阿刀氏の性格として, ①仏教・学問的分野を中心にした「文」的性格が強い, ②渡来人との関係が深い, ③対外交渉に関与, ④大和川交通~水上交通に携っていた可能性が認められるという点で, 実務的側面が強い氏族であったと指摘した。また, 以上の阿刀氏は物部氏との同族関係が認められ, 物部氏の勢力のもとに大和川流域に分布展開していた可能性が高いとした(アトという地名が多い)。さらに, 水上交通と物部氏との関係については, 物部氏の本拠地の河内は, 古代では自然条件による河川氾濫や水害の危険におかされることが多く, そのため, 恒常的に船が準備されなければならなかったこと(『日本書紀』仁徳天皇11年4月)などを考えれば, 物部氏は河川対策(水上交通手段~船など~確保, ひいては農業開発のための先進技術を朝鮮に求める等)に極めて強い関心を持っていたのではないかと指摘している。亀井の指摘は, 大和川流域における物部氏勢力の発展に関する自然的・地理的・文化的・経済的基礎を適切に述べているものである(亀井輝一郎「大和川と物部氏」横田健一編『日本書紀研究』第9冊, 55, 66~68ページ, 1976年, 塙書房)。
 - (27) 黒岩重吾・大和岩雄『藤ノ木古墳と六世紀』1989年, 大和書房。
 - (28) 黒岩重吾「私説 被葬者は物部氏系の有力人物か」黒岩重吾・NHK取材班『藤ノ木古墳の主は誰か』169~172ページ, 1989年, 日本放送出版協会。

(本学教授, 函館分校)